

大阪中学校選手権(7/25・26 万博)RESULTS

<男子の部>

200m 小森 24:68 (0)

1500m 白石 4:19:25 松本 4:30:01

<決勝> 白石 4:24:35 **8位**

3000m 島口 9:18:79 奥村 9:40:12

<決勝> 島口 9:29:56 **7位**

110mYH 堀本 15:24 (+1.7) 中司 DNS

<準決勝> 堀本 15:35 (+2.6)

<決勝> 堀本 14:94 (+2.0) **5位** 全国大会参加標準記録突破

共通4×100mR (大前・神原・塩見・小森) 45:89

走り幅跳び 塩見 6m04 (0) <決勝> 塩見 6m05 (0) **6位**

三段跳び 永沼 NM

円盤投げ(1.5kg) 大前 26m20 天野 26m42

四種競技 神原 2644点 **1位** 全国大会参加標準記録突破 近畿大会出場決定

110YH 15:09 (+0.2) 839点 砲丸投 12m05 609点

走高跳 1m68 528点 400m 53:32 668点

八木 1991点 **7位**

110YH 17:08 (+0.2) 616点 砲丸投 9m55 459点

走高跳 1m50 389点 400m 56:85 527点

<女子の部>

100m 山本光 13:25 (-1.8) <準決勝> 山本光 12:78 (+1.9)

<決勝> 山本光 12:86 (+0.3) **4位**

200m 畑田 26:40 (+0.7) <準決勝> 畑田 26:51 (+0.3)

<決勝> 畑田 26:34 (+1.7) **4位**

800m 木下 2:30:90

1500m 松城 5:18:16 鈴木 5:27:91

100mJH 亀澤 15:23 (+0.8) 西尾 15:43 (+0.8)

<準決勝> 亀澤 15:04 (+1.4) 西尾 15:50 (+0.4)

<決勝> 亀澤 15:11 (+0.2) **7位**

低学年4×100mR (小澤・山口あ・川村・畠山) 53:03

<準決勝> (小澤・山口あ・川村・畠山) 53:55

<決勝> (小澤・山口あ・川村・畠山) 53:64 **6位**

共通4×100mR (亀澤・山本光・西尾・畑田) 50:32

<準決勝> (亀澤・山本光・西尾・畑田) 49:87

<決勝> (亀澤・山本光・西尾・畑田) 49:51 **2位** 近畿大会出場決定
走り高跳び 沖村 1m48 内村 1m40 <決勝> 沖村 1m45
砲丸投げ (2.7kg) 村上 10m17 酒井 9m90
円盤投げ (1kg) 櫻井 22m29
四種競技 深野 2088点

100mH 16:10 (+1.8) 702点 走高跳 1m30 409点
砲丸投 8m13 408点 200m 28:80 (+1.2) 569点

【学校対校男子総合の部】

優勝 茨木西 32点 2位 咲くやこの花 30点 3位 盾津 22点
4位 富田林一 20点 5位 東雲 20点 6位 富田林二 18点

【学校対校女子総合の部】

優勝 咲くやこの花 33点 2位 東雲 21.5点 3位 河南 21点
4位 東我孫子 15点 5位 楠葉西 15点 6位 茨木西 14点
*トラックの部 2位 東雲 21.5点

大阪中学校選手権を振り返って

○ 大会初日。14時20分開始の男子110mYH準決勝に注目していた。2組6レーンに堀本。3週間前におこなわれた通信大会では準決勝敗退。3ヶ月近くの故障を乗り越えての出場であったものの、昨年度ジュニアオリンピックに出場、準決勝まで勝負した堀本には屈辱的な結果となった。その後、やっと実戦の勘がもどり、4ブロック記録会では15秒31の今季のベストタイムを出し、全国大会参加標準記録の15秒00突破を狙う最後のチャンスとなる今大会を迎えたのである。9時55分競技開始の予選では15秒24。確かな手応えがあり、この準決勝で突破する可能性大であったのだ。気温は34度。夏の好天となると、万博記念競技場のホームストレートは強い向かい風が吹く。そのために、バックストレートに写真判定機を用意し、スプリント種目は逆走する競技となった。スターターのピストルで5レーンの枚方長尾の山下選手が飛び出した。隣の4レーンの堀本がまさかの出遅れの展開となったのだ。10台のハードルを越えてフィニッシュ。1着、山下選手で14秒72、2着に石切の選手が入り15秒27、3着の堀本で15秒35。追い風2、6mの参考記録となった。「なぜ、出遅れた?」「緊張して足が震えて出遅れました」と、堀本。「1台目出遅れた分だけ負けたイメージ。1台目の着地からフィニッシュラインまでのスピードはトップの選手とほとんどいっしょであった。1台目のアプローチを修正すれば、標準記録突破が可能になるという



ことだ」と言い切った。準決勝は3組あって、各組2着と、それ以外の記録上位者プラス2名が決勝進出となる。堀本は3着。1組の3着が15秒31。次の3組で3着が15秒34以内で走れば、堀本は準決勝敗退が決まる。3組の正式発表を待つ時間はとても長く感じた……。やがて、第2曲走路サイドスタンドの電光掲示板の決勝進出者の名前、一番下に『242 ホリモト カオル』の文字が映し出された。プラス2名の一番最後、8番目に堀本が決勝進出を決めたのだ。陸上の神様はもう一度、彼にチャンスを与えてくださったのだ。

16時20分、110mYH決勝。暑さはいくぶんマシになったものの、太陽光線が肌を刺すように痛い。堀本は2レーン、隣の3レーンには優勝候補筆頭の玉出中学の森田選手。昨年度、いっしょにジュニアオリンピックに出場した選手である。祈るような思いでフィニッシュライン後方から彼を見つめた。バックスタンドには東雲応援団が同じ思いで陣取る。ハードル補助員20名も東雲の選手、これまたハードルの脇で同じ思いで見つめていた。ピストルの閃光で8人のファイナリストがいっせいにきれいにスタートを切る。シードレーン4人の選手が中盤から前に出る。必死で追いかける堀本。独走で森田選手がフィニッシュラインを駆け抜けた。正式発表の数字に「14秒27、大会新記録、並びに大阪中学新記録が誕生しました！」とアナウンサーが告げる。おそらく、今シーズン日本中学リスト1位の記録ではないか。この記録を聞いたときに、堀本の標準記録突破の可能性に期待を持った。速報結果に耳を澄ます。「2着、14秒45、3着に14秒55、4着14秒85……。」ここまでの選手はすでに標準記録突破を果たし、全国大会出場を決めている選手である。「5着は東雲の堀本選手、14秒94。14秒94、あらたに標準記録突破であります。おめでとう！」と、アナウンス。心の中でガッツポーズをしながら、堀本のところへ駆け寄った。すると、森田選手をはじめ、すでに全国行きを決めた選手が堀本のまわりを囲んでいたのだ。「よかったな、堀本」「お前といっしょに全国行きたかったんだ」と握手をして肩を抱き合っ、ともに堀本の全国出場の喜びを分かち合っていたのだ。その光景がだんだんかすんで見えた。どちらかと言えば、堀本は無口で人付き合いも器用な方ではない。そんな堀本がみんなの輪の真ん中にいて、みんな笑顔である。ほんの少し前までは近畿大会出場の3位以内、あるいは大阪チャンピオンの称号を目指してガチンコ勝負していた選手たちである。スタート前の鬼のような形相とはまったく正反対のさわやかな表情となった。不覚にも涙が落ちた。

追い風2mちょうど。公認される最大の風を受けた幸運に恵まれたことになる。後になって伝え聞いた話であるが、スターターのピストルが鳴ったときは、向かい風だったそうだ。陸上競技のルールでは風速計はゴール手前50m付近の内側にセットされることになっている。ハードル競技はスタート直後から1秒ごとに計測し、13秒までの平均風速が、そのレースの風力として発表されることになる。(ちなみに100mは10秒間、200mは先頭の走者が直線に入ってから10秒間で計測する) また風は斜め

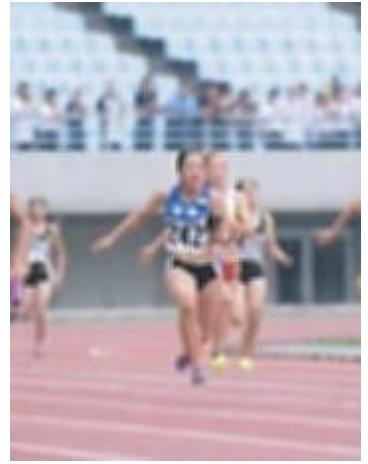
から吹いていたりすると、体で感じた風より弱く表示されることもあるものです。スタート時が向かい風であったとすると、後半になって2m以上の追い風を受けていたことになる。もっと厳密に言えば、13秒を経過してから吹く風はどんなに強い追い風でも計算に入らないことになる。堀本の場合はフィニッシュするまでの1秒94の時間でさらに大きな追い風を受けた可能性もある。様々な偶然が重なったかも知れない。それでも、このレースは奇跡ではないと断言する。レース後に選手だけではない、たくさんの先生方からも多くの祝福の声をいただいた。「先生、堀本くん本当に良かったですね。今日、一番競技場が盛り上がったレースでしたね」「スタートのときは、堀本くんしか見ていなかった。(故障で長く苦しんでいたことを知っていたから)自分の学校の選手ではないけど、ホンマ応援していたんや」…etc. たくさんの人に支えられていたのだ。堀本が苦境に立たされてもがんばったからこそ、みんなそれを知り応援してくれていたのだ。多くの人が彼の夢に立ち向かう力を信じ、背中を後押ししてくれたのだ。偶然ではない、間違いなく必然である。陸上の神様は最後の最後、土壇場でそのことを彼に、指導者に、そして陸上にがんばる多くの選手たちに伝えてくださったのだと思う。

- 今年も大勝負の日がやって来た。大会初日の最終種目。共通女子4×100mリレー決勝。毎年のように、この大舞台で東雲ブルーのセパレートユニフォームの選手が夢を賭けてスタンドから大声援を受ける光景を見ることができる。重圧と戦うジレンマより、感謝の気持ちが上回る。今年の優勝候補筆頭は連覇を目指す咲くやこの花。東雲は今大会まで咲くやこの花がバトンミスで失格したレースを除けば一度も勝てていない。なでしこジャパンがアメリカに勝つような確率であったとしても本気である。リレーに賭ける気持ちはどのチームにも負けていない東雲のDNAを受け継ぐ選手たち。予選から見事な走りで50秒32、準決勝では最後河南にかわされたものの、49秒87。イメージどおりのレースでこの決勝に駒を進めた。3レーンに咲くやこの花、5レーンに河南、6レーンに東雲。メインスタンドに陣取る東雲応援団も決戦前の雰囲気盛り上げる大声援となった。第1走者の亀澤が大きく手を振って「ひなり～、いきま～す！」第2走者の山本光菜里も「は～い。まほ～、いきま～す!!」第3走者の西尾も「は～い、せら～、いきま～す！」第4走者の畑田も「は～い」と答えて、最後はもう一度亀澤へ「まい～、いきま～す」、バトンより先に彼女たちの声がトラックを1周するいつもの儀式。ルーティンを繰り返す彼女たちの振る舞いは見事に堂々としていた。「ON YOUR MARKS」のスターターの声で競技場が静かになった。彼女たちにもう何もしてやることはできない。祈るだけである。

「SET！」胸が張り裂けそうになった。



ピストルの閃光で8人の走者がいっせいに飛び出した。第1走者の亀澤の走りに躍動感があった。この土壇場で今までで最高の走りを見せている。ぐんぐん前が出る。「やった、やった！行け〜」思わず叫んでしまった。バトンは第2走者の山本へきれいに渡る。このバックストレートのスピード区間を、これまた素晴らしい走りで追い風を受けて駆け抜けている。断然トップで第3走者の西尾へ。西尾もバトンをもらって曲走路でピッチをあげる。逃げる東雲、追う咲くやこの花、そして河南。第4コーナーのクライマックスへ。選手たちの継走の音が次々とかたまる。夢が輝く瞬間まであと100m。第4走者の畑田がわずかに早くゾーンを飛び出した。内側の咲くやこの花のアンカー島田選手にもきれいにバトンが渡りあざやかに走り出した。やがて東雲陣地の大声援が悲鳴に変わって、1着でフィニッシュしたのが咲くやこの花。48秒72。今シーズンチームベスト、そして大阪ランキング1位の大記録。2位に東雲49秒51、これまた今シーズンチームベスト、3位に河南で49秒93。



ひとつの夢が実現する瞬間には、無残にも打ち砕かれたたくさんの夢のかけらが存在する。そういう意味ではスポーツの勝負というのは残酷なことなのかもしれない。「咲くやこの花に勝つには先行逃げ切りしかないよ。第4コーナーまでトップで走れば、勝機が生まれるはずだ」この言葉を選手たちは信じて、そしてその言葉どおりに見事に走り切った。それでも、咲くやこの花のリレーチームは決して慌てることなく、自分たちのリレーをやり切ったのである。春の強化合宿のときから「私たちの夢はリレーで日本一になることです」ときっぱりと広言していた咲くやこの花の選手たちと、そのチームを指導した原田先生に完敗したのである。「相手の力が上回ったということ。この大勝負で自分たちの力を出し切った（東雲リレー）チームを褒めてやりたい」と思った。

レース後に泣きじゃくる東雲の選手たち。泣きたければ、泣きたいだけ泣けばいい…。勝者を讃える表彰式では、自分の感情を直接的に表現することはタブーである。敗者と

して勝者を祝福し、互いの健闘を讃え合う儀式であるはずだ。その理屈はわかっていたはずだが、それでも歯を食いしばっていても涙が落ちてくる…。そんな健気な選手と出会えた自分は何て幸せ者だろうと思った。このチームを8月の近畿大会では決勝で戦わせたい。そしてもう一度表彰台に。この戦いの先には、必ず次なる大きな夢につながっていく感動があるはずだ。



○ 大会当日朝の6時に西陵中に集合。砲丸投げに出場する酒井と村上、そして四種競技に出場する神原と八木、そして深野。西陵中や天王中の砲丸投げの選手もいっしょである。砲丸の投げこみを朝一番からおこなうために集まったのだ。天王中の松原先生は、自分の茨木西時代の教え子にあたり、投擲選手として活躍した選手であった。指導者になってもいつも情熱的に指導にあたっていて、この朝の特訓練習も彼の発案で始まったものだ。その甲斐あって、神原は苦手としていた砲丸投げで12m05の大幅自己ベスト。先の通信大会ですでに全国大会出場を決めている彼にとっては、この大会で優勝して近畿大会出場を決めることが既定路線であり、さらに記録を伸ばして全国大会でも表彰台という明確な目標を持っていた。選手というのは不思議なもので、ひとつの壁（全国大会参加標準記録突破）を突き破ると、大きく成長するものらしい。最初の種目であった110mYHでも、中盤のインターバルのリズムを崩したように見えたのだが、それでもほぼ自己ベスト（15秒08）と変わらない15秒09で走っている。地力がついたのである。走り高跳びが1m68、最終種目の400mでは53秒32にとどまったものの、2644点と自己記録に90点ほど上乗せして見事に優勝を決めた。この種目では八木も課題の走り高跳びで1m50を跳び、1708点で7位入賞。この種目だけで10点をゲットすることになった。



○ 通信大会とはうってかわって、いつもと同じ酷暑の大会となった。大会2日目は女子の個人種目の日となった。女子のリレーメンバーは前日に質の高いレース3本をこなしているため、暑さと疲れとの戦いとなる。まずは100mに出場した山本光菜里。準決勝では自己ベストの12秒78を出して好調である。この種目はレベルが高い。田尻中の坂野選手は準決勝で大阪中学タイ記録の12秒05で走っている。咲くやこの花の島田選手、吹田一中の中西選手も同じ準決勝で、それぞれ12秒36、12秒51と全国大会参加標準記録（12秒53）を突破して、この種目での全国大会出場を決めている。つまりは、山本が3位以内に入ると近畿大会出場を決めるには、全国大会の参加標準記録突破が最低ラインとなるきびしいレースとなるのだ。本人はそれも十分承知で、決勝レース前にも入念にスタブプロをセットして、スタートダッシュの練習を繰り返していた。14時15分、共通女子100m決勝。大阪ナンバーワンの最速スプリンター女王を決めるレースに、8人のファイナリストが勢揃いした。7レーンに山本、凜とした決意の表情である。「（公認ぎりぎりの）追い風が吹いてくれ」と、心の中で念じた。運命のピストルが鳴った。山本は低い姿勢で飛び出す見事なスタートダッシュを決めた。中盤を過ぎてほぼ先頭付近。そこから全国切符を手に入れている3人が前に出る。4着でフィニッシュ。近畿大会出場を逃したことになる。彼女の関心はそこではなかった。必死で電光掲示板を見つめる。12秒53以内の記録が表示されることを祈るような思いでひ

たすら見つめていたのだ……。やがて、正式発表。12秒86で4位、風はわずかに追い風0.3m。涙が止まらなかった。

- ハードルで全国大会出場を狙う亀澤と西尾にとってもきびしい準決勝となった。亀澤は予選で15秒23と順調な滑り出し。べらぼうに高くなった参加標準記録（14秒80）突破に望みをつないだ。西尾も15秒43と



悪くはないが、アプローチで重心を前に乗せていきたい。準決勝1組に西尾が登場。アプローチを修正して懸命のレース。後半リズムに乗れず、15秒50。この組の5着で準決勝敗退が決まってしまった。事態がよく呑みこめず、茫然（ぼうぜん）と立ち尽くす西尾。続く3組には亀澤。この大事なレースで今季自己最高の15秒04で走り抜けた。それでも4着。決勝進出は3組2着プラス2なので、首の皮一枚決勝進出に望みをつないだことになる。亀澤が西尾のところに歩み寄って大粒の涙と玉の汗が入り混じった西尾を抱きしめる。2人のようすを遠くで見守った。

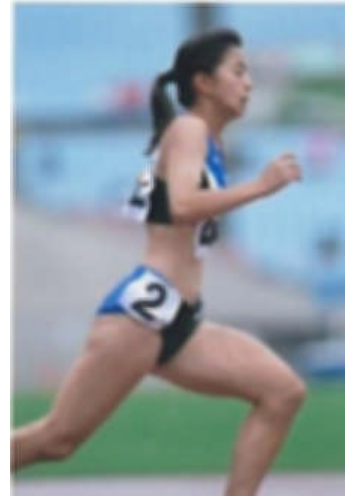
やがて、正式発表。準決勝進出のプラス2の2番目、最後に『242 カメサワ マイ』と表示されたのだ。前日の堀本とまったく同じ条件で決勝進出を決めたのだ。決勝レース前にストレッチを繰り返す亀澤のところへ。「よかったな。堀本と同じように、最後まであきらめずにがんばれよ！西尾の分まで……。」「先生、あのとき（西尾と抱き合っているとき）私は泣かなかったです。可能性が少しでもある限り、泣かないと決めていたから……。」彼女は激戦を重ねるごとに成長しているのだ。

14時30分開始、共通女子100mJH決勝。高らかにファンファーレが鳴り、8人のハードラーがそれぞれのルーティンを繰り返す。「第2レーン、亀澤さん。東雲中学」のアナウンスにスタンドの東雲陣地から大きな拍手。昨日の堀本の再現を願った。西尾もスタンドで祈るような思いで見つめていた。ピストルが鳴った。高さ76.2cmの10台のハードルを目にも止まらぬ早さで次々と越えていく選手たち。シードレーンからやや遅れて亀澤がフィニッシュ。正式発表は15秒11で7位。追い風0.2m。悔しい結果となってしまったが、意外と亀澤はさばさばしていたように見えた。今の自分の力と割り切り、次なる目標に切り替えているようだった。昨日のリレーでは一番泣いていた彼女だが、試練を与えられるたびにたくましくなっているのだ。「涙は悔しさだけで終わらせてはいけない」と、彼女から教えられたような気がした。

- 200mで近畿・全国大会出場を狙う畑田も苦しんだ選手権となった。彼女のベスト



記録は26秒22。この種目だけに賭けるのであれば、参加標準記録（25秒90）突破を狙って違った調整法があったはずだ。リレメンの4人は自分の個人種目よりも、リレーを最優先に置いて今大会にのぞんだ。2日目の予選で足が重く感じられるのは覚悟の上。決して言い訳はしない。予選で26秒40でほぼ順調なスタートを切った畑田であるが、準決勝では苦戦。参加標準記録突破を狙って、前半から積極的に飛び出したものの。後半失速してしまう。着どりの2着に入ったように見えたのだが、1000分の2秒以上の差があるために、同タイムの26秒51で着差ありで3着と判定されてしまった。結局、これまたプラス2の2番目で辛くも決勝進出を決めたのである。決勝レースではほとんど体力が残っていなかったかもしれない。それでも3位以内に入って、近畿大会出場だけは逃したくないと思っていたはず。決勝でもスタートから勢いよく飛び出す果敢なレース。彼女の積極性に成長を感じた。結局、4着。しかもまたも同タイム。今度は1000分の2秒未滿で着差がないという判定で4位が2人。いつもあまり表情を変えない印象がある彼女であるが、レース後は号泣した。力を使い果たした激戦のレースであったが、近畿大会出場だけはどうしても譲れなかったのではなかったか。大会が終わって彼女は笑顔で言った。「先生、一生懸命やったので悔いはありません」



- 全国大会出場を賭けたもうひとりの選手がいる。3000mに出場した島口である。先の通信大会では優勝したものの9分00秒66。全国大会参加標準記録（8分59秒00）までわずか1秒あまり。リベンジを誓った今大会であったが、暑さのために力を発揮できず、9分29秒56で7位とまさかの惨敗となった。走り幅跳びの塩見も順当に決勝ラウンドに駒を進めたものの、自分の助走に徹することができず、自己ベストに21cm及ばない6m05で6位と、近畿大会出場すら逃してしまった。男子1500m白石も8位入賞したものの、決勝レースの走りは記録的に満足できるものではなかった。女子の中長パートも惨敗。フィールド種目では沖村が走り高跳びで決勝ラウンドにすすんだものの、8位入賞を逃してしまった。自己ベストの1m51更新を狙っていただけに残念な結果となった。考えて見れば、大阪で勝ち抜くことは本当にむずかしい。みんな大きな夢を持って必死になって陸上競技に取り組んでいるからだ。この2日間、選手たちの熱い思いに何度も目頭を熱くした。何でこんなにも夢があふれているんだろう。きびしい戦いをしてきたはずなのに、戦いのあとは、みんなどうしてこんなにもやさしくなれるんだろう？ 膝の手術後の経過が悪く、走ることができない女子キャプテンの西川の声が出ない。応援しすぎたからだ。自分の辛さは決して語ろうとしない。チームをまとめるのにただただ必死であった。この2日間でまた一段と真っ黒に日焼けした96名の陸上部員たち。いつもたくさんの笑顔に勇気づけられているのだ。